

キリスト教会¹の宣教の困窮と約束²

カール・バルト著

5 加藤常昭訳

訳者まえがき

10 以下は、カール・バルトのよく知られている、一九二二年に語られた講演「キリスト教会の宣教の困窮と約束」(Die Not und Verheissung der christlichen Verkündigung)の新しい翻訳である。この新しい翻訳を用意しているのは、二〇二二年であるが、この講演がなされてからちょうど一〇〇年である。底本は、以下である。

Karl Barth, Das Wort Gottes und Theologie, Gesammelte Vorträge, Kaiser Verlag, 1924. S.99-124

15 なおチューリヒの Theologischer Verlag から刊行されている全集(Gesamtausgabe)の第三巻の二に、前掲書が収録され、丁寧に校訂され、脚注も付されて、一九九三年に刊行された。もちろん、それも参照した。以下に「全集」と略記されているのが、それである。

本書には英訳が二回刊行されている。最初は一九五五年である。

The Word of God and the Word of Man, tr. by Douglas Horton, Zonderhan, 1955

20 訳書の題は、原著とは異なっている。訳者は、一八九一年に生まれたアメリカ組合教会の指導者の一人で、世界教会運動にも活躍した、アメリカでバルトに傾倒した最初の世代に属すると思われる最初の神学者のひとりダグラス・ホートン牧師である。ホートンは、その「まえがき」で、最初にこの書物に出会ったときの感激を述べ、バルトをシュライアマハー以来の「最大の宗教思想家」と呼び、バルトはヨーロッパのプロテスタンティズムを救ったのだと評価する。そのバルトのメッセージが、この論文集にはつまっている、と
25 言う。英語圏にバルトを紹介する喜びを述べ、読者が、ここで、その力に触れ、思索する喜びと熱心と呼び覚まされるように願っている。

ところが興味深いことに、英訳はこれだけに終わらなかった。次の訳書が刊行されたのである。

The Word of God and Theology, tr. by Amy Margalec and Clark, 2011

30 訳者のアミー・マルガは、年齢は不詳であるが、女性である。プリンストン神学校で学位を得て、二〇〇六年にルター神学校の組織神学校の組織神学教授となっている。ルター

¹ 原語は、christliche Verkündigung である。いくつかの訳語を用いることができる。しかし、この講演で問題としているのは、キリスト教会がする説教による宣教行為である。その意味で「キリスト教会の説教」とも訳すこともできる。しかし、原文に、より即したものとして、「キリスト教会の宣教う」と訳すことにした。ただし、一箇所だけ、キリスト宣教としている。その方がコンテキストに合致すると読んだからである。

² 原題は Not und Verheissung der Berheißung der Christlichen Verkündigung である。Not を英訳で need と訳している。バルトの論述に従えば、困窮と訳すのが、日本語としては、最も自然であろう。

とバルトとを併せて論じた著書があるなど、ルター派であるが、アメリカで徐々に広がったバルトの理解者のうちでも、若い世代に属すると言うことができるであろう。訳者としてかなり長い文章を書いている。この書物には、その後、膨大な著述を生んだバルト神学のすべてが語られていおり、研究も進んだ新しいバルト理解の立場から、ホーソンの翻訳に満足しなかったのもであろう。かなり自由、いきいきと訳している。また関係文献を渉猟し、詳細な訳注を記している。以下の翻訳でも、それに助けられた訳注を書いている。「英訳による」としているときは、マルガ訳を意味している。

訳文は、ドイツ語原文の趣を忠実に伝えるような訳ではない。原文を解きほぐしている。原文は、細かく段落を作らず、一定の記号を使って八区分にしている。訳文では、その区分ごとに、数字を入れて区分を明確にした。更に本文には訳者の判断で段落をつけている。原文にはハイフンが多用されているが、日本語文としては、必ずしも必要はないと判断して省略している。

全集も英訳も、傍注は綿密であり、参照された文献の数も多いが、日本の一般の読者には煩雑であり、本文の意味を理解しつつ通読するためには、そこまで詳細に検討する必要があると思わなかった。一歩進んでバルト研究を究めたい方は、ご自身で全集、英訳を検討されればよいと考える。そこで訳者の判断で最小限の訳注を付し、通読する助けとした。

原文のドイツ語は、特に若いバルト固有の凝った表現が用いられ、文章構造も時に複雑になり、単語の用い方にも癖がある。若いときのバルトの文章は表現主義であるとも言われる。それに独特のユーモアのセンスもある。いずれにせよ難解であることは確かである。今回は、あまり原文にこだわらず、原文を解きほぐして、日本語としてできるだけ読みやすくしたかったが、どこまで読みやすくなったか、確信はない。

訳者が車椅子に頼る高齢者であり、不自由であったので、文献を用いるのにも制限があった。そこで、東京神学大学の小泉 健教授に随分助けていただいた。特に記して感謝する。

60

本日、総地区長のヤコービ博士から、私がいただきましたお招きには要求が含まれております³。それは、「私の神学を理解する」ための、ひとつの手引きをしていただきたいという求めであります。そのように真剣に「私の神学」を語るのを聴きたいという求めは、いつも、私を少々困惑させるものであります。それは、私が勤しんでおりますものが、よ
65 かれあしかれ、まさしく神学と呼ばれるものよりも、いささかでもましなものなのです、などと言いたいからはありません。神学に携わっているということを恥じるという子どもじみた病は、いささか克服してしまっているつもりであります。皆さまのうちの何人かは、おそらく、この病をよく知っておられ、しかも、既に克服しておられると思います。

私は、もともと、自分の神学をどこに成り立たせたいのか、と、自問せずにおれません
70 ので、おそらく、そのためであろうと思います。いったい、その名に値するカテドラル、あるいは皆はどこにあるか、問うのであります。そして、その理解のために、何らかの基本的なことを手がかりに、皆さまに〈手引きする〉ができるであろうと思っております。

私が十分に吐息をつかざる得ないことがあります。しかし、皆様には正直に白状せざる
75 を得ないことであります。それは、いずれにせよ、〈私の神学〉と呼ばざるを得るものが、丁寧に見つめると、結局は、あるただひとつの点において成り立つということでありま
す。しかもそれは、ひとがひとつ最小限のこととしてまさしく神学と言えるものに対して
まともに要求されるような立場というようなものではなく⁴、一種の数学的⁵点であります。
その上に、われわれは立つことはできません。単純に言って視点であります。

まさしく神学でありますならば欠けてはならない、そのほかのわのものは、私において
80 は、まだ始まったばかりの段階であります。しかも私にわかっておりませんのは、自分が、その段階を越えるだろうか、ということであります。そうです、私は、ただそこから抜け
出すことを願うだけかもしれない、とも思うのであります。つまり私は、いい気になって、偉大な創造力ある天才たちが神学的プログラムを作り上げてしまったり、作り上げつつあ
るのに対し、それに匹敵するような、あるいは、それと同じような評判になることをやっ
85 てやろうなどとだいそれたことは考えておりません。

³ 全集、英訳にはヤコービの書簡そのものも併載、紹介されている。ヤコービは、一八五〇年の生まれ、当時、既に七〇歳を超えていた。何によって学位を得ていたかわからないがドイツ改革派教会の牧師であった。領邦教会そのものは、元プロイセンに属し、合同教会であった。ドイツのザクセン領邦教会の南西シュブレンゲルの総地区長であった。その地区の牧師会が、ザクセン州、ケーゼン(Koesen)の近くの、元修道院のシュールフォルタという学校関係の施設で、一九二二年七月二四日から三日間、開催された。バルトは、そこに招かれて講演したのである。当時、バルトは、ゲッティンゲン大学の改革派神学担当の教授になったばかりであった。ヤコービは、ローマの信徒への手紙について、脚光を浴びた著書を書いたバルトの神学への手引きを願い、特に神への信仰を深め、神と世界の関わりを明らかにしてほしい、と頼んでいる。それに応えて、バルトは依頼を受諾し、すぐに、この講演の題を提示している。

⁴ バルトが「立場」(Standpunkt)という考え方に対して『ローマ書』で否定的な考え方であることを強調したことは知られている。たとえば第3版の序言にこう書いている。「キリストの霊は、われわれがその上に身を置くことができる様な立場などではない。われわれはそのような立場に立って、パウロであろうが、誰であろうが、教師のように批判するのである。(全集)

皆さまが、神学論争に対する私の貢献、従ってまた、私が今日語りたいと思っているのは何であろうと考え、よりよい保守的なものなのか、自由なものか、リッチェル的なものか、あるいは宗教史学派神学のようなものとお考えになるかもしれません。しかし、そうではなくて、一種の欄外注のようなものかとお考えいただきたいと思います。つまりいわゆるグロッセ(Glosse、注釈)でありまして、いろいろな神学のすべてに協調したり、協調しなかつたりいたします。しかし、これは、私自身確信するところではありますが、これがそれ自身以上のものでありとうしますと、つまり他の神学と並ぶ新しい神学として場を占めようとする、たちまち意味を失うものなのであります。その限り、トゥルンアイゼン、ゴーガルテン、そして私が、周知の言葉の意味で〈学派形成〉を目論んでいると言われるようになれば、やんぬるかな、であります⁵。

私の考えは、まさにこうであります。誰にいたしましても、自分の学派のなかに、また自分の親方である神学者のもとに留まるとすれば、その修正役を担うのであります。ケルケゴールの言い方を用いれば、ご馳走の味を更によくする何かの味付けを付け加えるのです。自分はそのようなものだと思えばよいのだと思っております。いずれにいたしましても、欄外注と申しまして、そこには並々ならぬものが含まれております。〈私の神学〉が他のまともな神学に対する関係は、例えて言えば、兄弟団の教会が、他のしっかり歩んでいる諸教派や、諸教会共同体に対する関係のようなものであります⁶。いずれにいたしましても、新しい、固有のトゥロープス⁷を形成しようなどというものではありません。

さて、しかし、ここで既に私の第二の願いを申し上げなければなりません。私が、そのようにランク付けされることをお断りをするからと言って、それを高慢だとか思い上がりだと考えていただきたくないのであります。そうです、私はよく承知しております。私どもが空中に立てないことを。そうではなくて、地上のどこかに立っているのであります。私は、この点では最初のひとでもなく、ただひとりでもありませんが、私には、一種の憧れの的が眼前に漂っております。左に、右に、中央に現存するもろもろの神学的可能性を貫いて、すべてを理解し、すべてを包括し、すべてを克服するような、一種の〈旅人の神学〉(theologia viatorum) ともいふべきものが彷彿としているのであります。今日、何らかの仕方で「諸々の方向を超えて」立っていきたいと願わないひとがいるでしょうか。

更に私が承知していることがあります。それは、神々がそのひとを愛して、夭折させてしまったりしたら別であります⁸、本当に旅をしている神学者、あるいは自分はそのつもりでいる神学者の誰にしましても、カテドラーレ(大聖堂)とか砦ともまでいかなくても、

⁵ ちょうどこの頃、雑誌「時の間に」の刊行の機運が高まっており、翌年から雑誌刊行が始まったのである。

⁶ ヘルンフト派、その他、敬虔派(福音派)は、それぞれ独自の教会共同体を組織する。それらを兄弟団と呼ぶ。いずれにしても領邦教会内に留まり、領邦教会の礼拝をも重んじている。同時に、自分達だけの牧師を迎え、独自の集会所を持っており、礼拝・諸集会を開催し、領邦教会に対する批判的姿勢を固持している。

⁷ トロープス(tropus)とはラテン語。中世後期のカトリック教会においてグレゴリオ聖歌の整備と共に広まった、ミサ曲のキリエなどの定型の歌詞に平行または挿入して付加された補足説明的な歌詞を含む部分のことである。自分固有の神学を語り出すのではない、という比喻であろうと思う。

⁸ 古代ローマの歴史家プルタルコスPlutarchusの叙述の一節だそうである。(全集、英訳)

せめて旅をするロマの人びとの天幕ぐらいのものはやはり建ててしまったということなしに、その人生を全うするようなひとは、ひとりもないということでもあります。そうなりますと、彼にとって正しいか正しくないか、いずれにいたしましても、注釈に代わってテキストを、つまり、新しい神学書が書き表されたということになるのであります。ケル
120 ケゴールその人にとりましては、チェス盤上では、全く思いもかけない奇手を打つこのひ
とにとりましては、言うまでもなくそれ以外の成果はありようがなかったのであります。
そこで、〈私ども〉は、これでよしとしなければならないと思いますが、今、多くの人びと
の目の見るところ、今起こっていることは、いささか驚くに値する、更に進んだ神学が企
てられるにいたったということにほかならないということでもあります。霊的空間を満たし、
125 歴史的広がりを得ており、十分に問うに値し、古今のまことに堂々たる隣人である諸神学
者と並び立つ神学であります。見たところ、いささか神秘主義的でもある新しいマルキオ
ン主義とまでは言わなくても、新しいスーパーナチュラリズムであるかとお考えかもしれ
ません⁹。そう見てしまうのを私どもは妨げることはできません。

ただ、ここに見えているものが何であるかを理解しようとするのが大切であるとすれ
130 ば、私どもになし得ることは、ただひとつ、ここで確かめたいことですが、そのような、
学派形成、あるいは、体系を意図したり、準備したい、ということで、私どもがこんなこ
とをしているのではなくて、まさしく、「キリスト教会の宣教の困窮と約束」ということか
らなのでありまして、私は、今日、これを主題として、皆さまにお話ししたいと思ってい
るのであります。

いささか説明させていただいてよろしいでしょうか。本来の主題に関わる大切なこと
135 であります。私は、皆さまと同じ牧師でありまして、一二年間働いてまいりました。私の
神学を持っております。もちろん自己流の神学ということではありません。私は、故郷に
おいて、意識するというよりも無意識に継承していた改革派的傾向の神学に、忘れがたい
恩師ヴィルヘルム・ヘルマンから学んだことを接木させていただいたのであります。そう
140 です、この改革派的神学というのは、今日でも、職務上、私の立場としなければならない
のであります。喜んで、自分の立場としております¹⁰。

このように、私には私なりの神学的思考習慣というのがありますが、それに依存するよ
うなことではなくて、ありとあらゆる環境を通じまして、その後、ますます強く私が直面
させられてきたことは、説教という牧師特有の問題であります。確実に皆さまの全員がよく
145 知っておられることですが、一方に人間が生きるという問題があり、他方に聖書が語る
内容があり、その間にあって、正しく対処しようと試みたのであります。人間に對しまし
ては、牧師として、人間が生きるときに知る未曾有の矛盾の中へ語り込むように、私は、
まさしく牧師として語るべきでありましょう。しかし、それに劣らぬほどに未曾有である
聖書のメッセージをも語るべきであります。聖書は生きることが含む矛盾に對しまして、
150 新しい謎として対立するのであります。

⁹ すでに始まっていたバルト批判をしていた人びとのなかに、こういうレッテルを貼る人びとがいたの

¹⁰ 言うまでもないが、この時、バルトは、ゲッティンゲン大学で、改革派神学の講義を担当していたのである。

このふたつの偉大なもの、生きることと聖書とは、十分にしばしば（そしてもっとしばしば）、スキュラとカリュブデイスのような怪物のように現れてまいります¹¹。キリスト教会の宣教は、どこから来て、どこへ行くのか。そこで、いったい誰が牧師であり得るのか、説教し得るのか。私は確信しておりますが、皆さん、すべての方が、この状況を知り、この苦悩を知っておられると思います。皆さまの多くは、おそらく黙ったまま、私よりも、もっとずっと深く、強く、いきいきと知っておられるのであります。従って私には皆さまに、本日、本質的なことを何も申し上げる必要はありません。既に私の神学のなかに導き入れられておられます。皆さまが沈黙しておられる間に、私は語ってまいりました。沈黙には時があり、語るにも時があります。私は、語ることを選ぶという可能性の価値を過大評価するつもりはありません。私自身は、黙っていたかったという願いを既に抱いているのであります。

さてしかし、事情はこうでありました。よく知られた牧師の状況であります。土曜日には、デスクに向かい、日曜日に説教卓に立ちます。私の場合、そこに凝縮されて現れるのが、すべての神学の欄外注を書くという、あの状況であります。それが、遂には、あのローマの信徒への手紙の大きな注解書となったのであります。私の友人たちにも、似たようなことが起こっておりまして。いわば、あの状況からの脱出の道が見つかったかのようなことが起こったわけではありません。まさにそのようなことではなかったのであります。しかし、私にとりましては、まさにこの状況そのものが、すべての神学の本質を解明するものとなったのであります。神学とは、牧師の、このような出口のない状況と問いとを表現するものであり、それ以外の何ものでもあり得ないのではないのでしょうか。人間がこの課題に自分で進んで取り組むならば、人間が、そこで入り込んでしまう窮迫状況でできるだけ真実に描写するのが神学であります。つまり、困窮のなかから、救出を待つ大いなる望みを抱いて叫ぶ叫びなのであります。

神学には文化的課題というのがあります。またこういう課題も持っております。つまり教育という課題であります。これらの課題を果たすために、他のこともすることができます。私どものところでは、こういう言い方もするのであります、「牧師を学問する」べく決心をしました、将来を全く予感していないとも言えるし、予感に満ちているとも言える若者たちを、教育するのであります。神学の伝統に従い、歴史、組織、実践の諸素材を学びながら、このような、最も深く内面的な、最も真実の本質を、繰り返して何度も意識する他に、何をなし得るのでしょうか。言い換えれば、若者たちが備えようとしておりますこの職業にとりまして、このこと以上に、その特質を示すものがありますでしょうか。

¹¹ いずれもギリシア神話に登場する怪物である。ホメーロスの『オデュッセイア』ではスキュラは三列に並んだ歯を持つ六つの頭と一二本の足が生えた姿と書かれているが、別の神話では上半身は美しい女性で、下半身からは足の代わりに幾つかの犬の体が生えた姿をしているとされる。カリュブデイスは、もともとポセイドンの娘であったが、並外れて大食だったためにヘラクレスが連れていた物の牛を盗んで食べてしまい、罰を受けて怪物の姿になり、メッシーナ海峡で船乗りを襲うようになった。日に三回食事をするために海水ごとあらゆるものを吸い込み吐き出していた。彼女の周りには渦が巻き船がそこに取り込まれると抜け出せないため非常に恐れられた。つまり渦潮の主であった。この海峡にはスキュラも住んでおり、難所であった。

さて、しかし、神学の学びをすすめておりますときに、これは、このような状況に自分を引き入れてしまう、このような務めに備えているということなのだとすることに、ほとんど気づかないというようなことに、どうしてなるのでありましょうか。どうしても私は、
185 ただひとつ問わざるを得ませんでした。私が知っていた神学におきましては、牧師が現に存在するということで、既につけざるを得ない疑問符、感嘆符が、いわば、何の役割をも果たしておりませんでした。どうしてそういうことになったのでありましょうか。その結果、私が牧師になりました時、まるで武装した男に襲われたかのように、真理に襲われたのであります。

190 いったい、私の問いは、本当に、私だけの問いにすぎなかったのでありましょうか。どうして、言ってみれば、他の人びとは脱出の道ををわきまえており、私だけが見つけていなかったということになるのでありましょうか。私は、人びとが道を出て行くのを見ておりました。しかし、私が、これこそ脱出する道だと認めることができる道ではありませんでした。そうなりますと、私がよく知っているさまざまな神学は、ただそれに触っただけで、
195 あの状況を、これには耐えられる、これは克服可能であると言ひ表そうとしたのでありましょうか。そうではなくて、この状況をしっかり把握すべきでありました。しっかりと見据えるべきでありました。そして、おそらく発見すべきであったのであります。神学にとって最も固有の対象が、まさに、この状況におきまして、その完全に耐え難いこと、完全な意味で克服しがたいことを明らかにしつつ、自己を宣言するものであることを発見するべきであることを。私は、更に私自身に問い続けております。まさにここから、すべての
200 の神学が、何とすばらしい光を享受することになるであろうか、と。神学は、結局のところ、キリスト教会の宣教者たちが、困窮に満ち、約束に満ちていることを知ること以外の何ものでもないことを欲するのでありまして、それは、神学にとりまして、それ自身の救いにとりまして、ますますよいことではないのでありましょうか。これ以上のすべての
205 ことは、このような知識の結果として生じるのではないのでありましょうか。

もう一度、問います。これは、私に偶然与えられた私だけの問いなのでありましょうか。この問いに迫られて、私は、あのローマの信徒への手紙の研究にとりかかったのであります。それも、最初は、私というものを、私自身に、よくわからせるための試みにすぎないはずでありました。あの書物のなかには、もちろん、一見したところ、全くそれとは関係
210 のないものがつまっております。新約聖書神学、教義学、倫理学、哲学などであります。しかし、皆さまが、この書物を最もよく理解なさるのは、そのすべてから、何度も繰り返しまして、牧師の声を聴き取られたときであります。この牧師は、問うているのであります。説教するとはどういうことであるか。と。説教するということをどのように作り上げるのか、ということでありませぬ。そうではなくて、どうして、説教するということができるのか、ということでありませぬ。
215

そのなかに含まれております、もうひとつのこと、それは既に、光そのものであるというのではありませんが、それを映すものではあるのであります。私は、それを指し示されている私自身を見ました。そして自分でも、それを指し示したいと願っているのであります。そのようにして〈私の神学〉なるものに到達したのであります。差しあたり〈訂正の

220 神学〉と言っておきますが、これで少し道を広げることになりましょう。私がこれらすべてを語りますのは、皆さまに私の自伝的なこととお話をして、厄介をかけるためではありません。そうではなくて、皆さまに、このことをお示ししたかったのであります。私の意図は、少なくとも、何よりも、ひとつの新しい神学などではなくて、いわば、外から神学に注がれる照明、しかも、皆さまが神学者というのではなくて、少なくとも端的に牧師として立っておられるところから射してくる照明の光であります。

225 私にはこう思われます。本日、私どもは、お互いを理解し合う以外にありようがありません。そのためには、皆さまが、このただひとつのことを、私から聴き取ってくださればよいのであります。まず皆さまが、ユーモアをお持ちですなら、いくつかの偶然的な事柄は、友情をもって無視してくださいまして、私が、新しい、驚くべき神学を携えて乗り込んで来たのではなく、そうではなくて、皆さまの神学がどのようなものであろうと、単純に、牧師としての皆さまの状況をよく理解し、それに参与しようと、皆さまの傍らに立ちたいと思っていますのであります。それ故に、正しく理解していただきたいのであります。私は教授として皆さまに語るよりも、むしろ、牧師として語るなのであります。事柄の状況から申しますと、それは、私に委ねられました使命を、意味深く叙述することなのであります。

235 私にただひとつの視点だけではなくて、立場もあるといたしますと、それは単純に、説教壇に立つ男の、よく知られた立場であります。このひとの前には、秘義に満ちた聖書があり、また多かれ少なかれ、多数の聴き手の、秘義に満ちた頭脳が並んでいるのであります。ところで、秘義に満ちているというのは、どういうことでありましょうか。いずれにいたしましても、はて、それは何でありましょうか。もし私が、この、それは何か、ということ、その内容のすべてを尽くして、皆さまにはっきり思い出していただくことに成功するとすれば、いずれにせよ、皆さまの立場でもある私の立場だけではなく、私の視点にも賛同していただくことになりましょう。皆さまが、私の神学をどのように思われるといたしましても。

245

二

日曜日の朝、鐘が鳴り響ます。教会員たちと牧師とを、呼び寄せるためであります。そのとき、明らかに、そこにしっかりと存立しているのは期待であります。偉大で、意義に満ちた、まさに決定的な出来事への期待であります。いわば、この出来事に参与した人びとの中に、この期待が、どれほど強く生きていることか。およそそこで、人びとが、この希望を意識して抱いている人びとであるかどうか、それは全く問題ではありません。状況全体のなかに、この期待がしっかりと存在し、そこに横たわっているのであります。

255 そこには、とても古い制度機構(Institution,教会のこと)があります。とても外から攻撃することは困難であります。内部から汚すことも困難であります。荒廃することのない生命力、あるいは、私どもに言わせれば存在力もあるのであります。歩行力もあり、同時に耐える力もあります。古風ですが、通例は、モダンでもあるのであります(何がモダー

ンかは、そのときによりますが)。もっとも、それ自身は、いずれの言葉でも、そう呼ばれることを望みません。非常に厳しく、知的に、政治的に、社会的に、宗教的にさえ震撼させられたのでありますが、今や、勝利に満ちて成長してきているのであります。そして、将来においても、このままであってはならないとするべきではないのでありませんか。

このような制度機構が存在する根拠はひとつの要求にあります。しかし、この要求は、あのもろもろの事実とは、グロテスクなほどに矛盾しているように見えます。しかも、この要求を正当化し、可能とするものを、あえていささかでも大声で、はっきりと、余すところなく否定するひとはまことに僅かなのであります。世が注目すべき人びとの否定的発言があったとしても、まことに僅かなのであります。

ここにひとつの建物が建っております。この建物を飾っております、さまざまな象徴、絵画、什器は別として、古今の建築様式によって建てられておりますが、その建築様式が語ってくれておりますのは、この建築が、異常な事物を見せる展示場として考えられたものである、ということであります。そこには、人間がおります。ほんの二、三人であります。この辺りでは、それが通例とされております。しかし、更に二、三百人の人たちが、本能か、自分たちの意志に駆られまして、この建物のなかに流れ込んできております。そこで、この人びとは、何を求めているのでありましょうか。昔からの習慣を満足させるためでしょうか。そうです、そうかもしれません。しかし、そのような習慣は、どこから来るのでありましょうか。互いに語り合い、また教えを受けております。いずれにいたしましても、まことに不思議な語り合いであり、不思議な教えの享受であります！ 信仰を養う建徳¹²のためでしょうか。そうです、そのようにひとは言うのです。しかし、建徳とは何でありましょうか。この人びとは、それをいささかでもわきまえているのでありましょうか。つまり、なぜ自分たちが、ここにいるかをわきまえているのでありましょうか。

もしそれが、年老いた、愛すべき母親であるならば、そのひとがそこにいるというだけで、既にひとつの出来事を指し示しております。人びとは、この出来事を待っております。あるいは、やはり待っているようには見えるのであります。たとえ、すべてが死んでしまった、死に絶えてしまったと言われましても、かつては、この出来事が期待されていたのであります。

そして、そこにひとりの男がおります。今起ころうとしているであろうと思われる出来事への期待は、ひとえに、この男に懸かっているのであります。この人の責任であると思われる。この男が、この出来事に関わる技術を心得、会得していると言われるからだけではありません。社会から報酬を受け、ここに任命を受け、つまり、反論もせず、この機能を果たしているだけというだけでもないのであります。この機能は、明らかに、この出来事のためのものでありましょう。

いいえ、ここには単なる機械的作用が働いているだけではありません。そこには自由も

¹² 「信仰を養う建徳」と訳した言語は *die Erbauung* である。「建物を建てる」という言葉であり、ギリシア語ではオイコドメーである。パウロが愛用した言葉である。これを日本語で徳を建てる」と訳したのである。新共同訳では、人や教会を「作り上げる」と訳されている。コリントの信徒への手紙一第一四章三節その他である。ひとりのひとの信仰を作り上げ、そのようにして、教会という信仰の共同体を作り上げるのである。

働いております。この男は自分自身でこの職業を手に入れているのであります。どんな理解が生じ、誤解が生じているか、神がご存じであります。しかし、とにかく、この男が、自分の短い、ただひとつの生涯を、全くただ、この出来事の期待と結びつけてしまったのであります。

そして、この男が、教会員の前で、教会員に代わって祈りをするでありましょう。よく理解していただきたい。祈るのであります。神に向かつて！

聖書を開きます。聖書の中から、無限の射程を持つ言葉を朗読いたします。すべて神に関わる言葉であります。それから彼は説教壇にのぼります。何たる大胆な行為でありましょう！ 説教するのであります。聖書から読み出されたものに、自分の頭脳とハートから、いささかのものを付け加えるのであります。〈聖書的〉思想であります。あるひとは、最善の知識と最善の良心をもって、大胆に聖書のページをめくって得た思想を語り、あるひとは、いい加減に聖書をめくり思想を得ます。そうです、昨日には、〈保守的な〉説教を準備したひともあり、〈自由な〉説教を準備したひともあります。だが説教が語る内容を考えますと、語り損ねることが、まことに多いのではないでありましょうか。ここでは、おそらく、いずれの場合でありましても、否応なしに、神について、語るべきでありましょう。

それから、この男は、会衆に歌を歌わせます。古風な歌であります。恐るべき思想内容がいっぱい詰まっております。随分昔に眠りにつきました父祖たちの苦痛、戦い、勝利を証言する思い出、死の香りがする証言であります。すべて、ひとつの測定不能の出来事の淵まで導いてくれます。牧師も教会員も、自分たちが歌ったり歌わなかったりするのが何であるのか、理解しているのか、どうかわかりません。しかし神の回想に満ちております。繰り返し、神を思うのであります。「神は臨在される！」と歌います¹³。神は臨在されるのであります。この状況全体が証言しております。叫んでおります。明らかに、神はおられる、と。しかも、牧師が見、また教会員から見ますと、この状況が、疑わしいものであり、悩みの種になり、慰めなきものであったとしても、そのことに変わりはありません。状況が満たされております時にまさってさそうであります。つまり、人間的に申しまして、うまく成功しておりますして、状況の問題が半分くらいは完全に覆われてしまっている時よりも、しっかりと神のご臨在を、証言しているのであります。

三

さて、しかし、状況とは、何を意味するのでありましょうか。あの期待が指し示している出来事とは、いったい、いかなる出来事でありましょうか。期待は、しかし、その出来事の中に、自分を反映させているのであります。この関連において、「神が臨在される」とは、何を意味するのでありましょうか。私どもが、花咲く桜、ベートーフェンの第九番の交響曲、国家、あるいは、私どもの、あるいは他の人びとの尊い日常の仕事に、同じ語り方を適用することを許されるだろうとするのも、同じようなことなのではありませんか。

¹³ 全集の注によれば、讃美歌詩人テルシュティーゲン(Tersteege)の、今も歌われる讃美歌に「神は臨在される！」toiという讃美歌(一七二九年)を思い起こしていると考えられる。

そうでなければ、これらは余計なことをしていることになるのではないのでしょうか。

まさしくこの状況に備わる特殊なるものが、ある特別な、ひとつのこと、特殊であり、
330 より大胆な思いで語られる「神は臨在される！」ということ、なぜ目標にしていない、
ということがあるでありましょうか。こうなのではないのでしょうか。この状況の中へ、人
間が身を置こうとしますならば、つまり教会堂に入ろうとしますならば、そこで人びとは、
知ろうと知らなかろうと、桜、交響曲、国歌、日常作業、その他もろもろのものを、何ら
335 かの仕方で消耗し尽くした可能性として、背後に置いてきているのであります。答えは、
こうであります。神は臨在される。このことは、これらのすべての可能性のなかに、疑い
もなく、与えられていることであります。これらの事物の真理内容であります。だが、生
きることの意味を語るその証言は、またもや疑わしいものとなりました。現存在の大きな
謎であります。私どもを取り囲む自然の、理由がわからない無言であります。個々の、時
340 間の中に存在するすべてのものの偶然性であり、闇であります。諸民族と個々人の苦悩で
あり、運命であります。根元悪、死です。これらは何度もやってきます。そして語ります。
私どもに、神が臨在されることを確かなこととしてくれる全ての声よりも大きな声で語り
ます。

問いはもはや抑えつけることはできません。ますます燃えるように熱くなってきておお
ります。いったい、それは本当のことなのでしょうか。散らされている者たちがひとつに
345 されるとの予感、それは真実なのでありましょうか。諸現象の流れの中に、静かに存在する極が
あるとの予感、それは真実なのでありましょうか。もろもろの星の背後のどこかに義があるとの
予感、それは真実なのでありましょうか。そうではなくて、今や、一挙にして私どものいのち
となっている、あの出来事のなかで、地上を覆う天を予感すものところにやって来るので
あります。日曜日の朝というグロテスクな状況のすべての中へ身を委ねるのであります。
350 この状況こそ、先ほど語った可能性の潜在的な表現であります。よくお分かりになったで
ありましょうか。人びとが聴き、認識し、知りたいと思っているのは、単なる主張、見解
披露というような言葉だけを聴きたいのではありません。しかも、その人びとがまさに内
的であり、靈感を受けていればなおさらであります。人びとが聴き、認識し、知りたいと
思っているのは、それは本当ですか、ということなのであります。つまり、ほかのいかな
355 ることでもないのであります。それは、ちょうど猫が、この熱いお粥のまわりでうろうろ
しているようなものであります。

このような人間の欲求が聞かれるのは稀であるとか、それほどの切実な願いに出会うの
はほとんどないなどということ、私どもが間違いを犯さないようにいたしましょう。こ
360 のようなことを人間が単純に叫び出すことは、もちろん、ないことなのであります。私ど
も牧師たちの耳に囁いてくれることもないのであります。しかし、人びとが沈黙している
からといって、錯覚を抱かないようにいたしましょう。

血と涙、最も深い絶望と最高の希望、あのこと、いいえ、あの方を捉えたいという情熱
的な願いであります。世界の創造者であり、救済者であられるが故に、世界を克服される
方であります。初めであり、終わりであり、世界の主であられる方を捉えたいのでありま
365 す。自分に言葉を語り聞かせてほしい、という情熱的な願いであります。審きにおいて

恵みを約束してくださるみ言葉であります。死におけるいのち、此岸における彼岸、すなわち神の言葉であります。

つまり、これが、私どもの教会に通ってきてくれる方たちの背後にあるものであります。人びとが望んでおりますものは、いわゆる現実におきましては、まだ眠っているかもしれません。まだ市民的で、まだごく通常のこととして現れているかもしれません。現実にお勧めできないのは、人間の前終末的な、あるいは前前終末的な欲求を頼りにしてしまうことであります。私どもがそれをしたからと言って人びとは感謝などしないであらうでしょう。人びとが望んでおりますのは、自分たちが自分を理解する以上に、私どもが人びとをよく理解してあげているということであります。自分たちが自分たちを真剣に受け止める以上に、私どもが人びとを真剣に受け止めてあげるということであります。人びとが傷ついて私どもを訪れる時、その傷に手を突っ込んでしまうからと言って、私どもに愛がないということにはなりません。そうではなくて、人びとが私どものところに来たのはなぜかを私どもが知らないかのごとく、人びとを軽くあしらったりすれば、愛がないということになるのであります。人びとが私どものところに来るのは、終局的な、最も困難な問いに衝き動かされてのことだと想定したからと言って、私どもが幻想を抱いていることにはなりません。そうではなくて、人びとが私どものところにやって来ましても、前終末的な答えを与えて、食べ飽きさせてしまうようなことをすれば、幻想を抱いていたことになるのであります。

おお、そうです。人びとは、もちろん、暫定的にそれをするのであります。自分たちが、本来、求めておりますものを見つけておりませんでも、心を動かされ、喜ばされ、満足させられるということはあるのであります。基本的には、ほかのところでも見つけられたものではありましょうが、(おそらく、宗教的、キリスト教的、保守キリスト教的など、さまざま形式において) 見出し得たかもしれないのであります。

いずれにいたしましても。カトリシズムは、この点でうまくやっている強力な例であります。人びとをつなぎ止め、子守唄を歌って聞かせ、ひとつの、さいわいにも選ばれました、究極の暫定的なものを提供して、人びとが本来求めていたものを忘れさせるのに成功しているのであります。しかし、錯覚を抱かないでいただきたいと思います。私どもはカトリックではありません。もろもろの教会共同体もそうではありません。私どもがおります状況は、もう少し進んだ段階の状況であります。この段階におきまして、最もよく選ばれた麻薬を提供し、どんな後退現象があろうとも、ほんの部分的であり、ほんの短期間でありましても成果を挙げることができているのであります。だが、善意の人が、私どもが自分の仕事をうまくやっているではないか、と保証してくれても、信用しないようにしましょう。私どもの技巧の全てが、状況の意味を回避することに成功したと言われても同じことであります。状況を深刻なものにしないでくれと、悩みつつ警告してくれる人の声にも耳を傾けないようにしましょう。私どもが、通常は的に当たる射撃などしないのに、これらは必ず当たるようになさいなどという声にも耳を傾けないようにするのです！

これらの声が語り出しているのは、神の教会の声ではありません！ 私どもの場合、状況が真剣に意味するところは、人間が、み言葉を聴くことを欲するということであります。

それは即ち、それは本当ですか、という問いへの答えに、知ってか知らずか、人びとは動かされているのである、ということでもあります。日曜日朝の、この状況は、終局の歴史であります。終末論的であります。聖書の視点においてということはしばらく全く無視し、人間の視点からだけ見ましても、そうなのであります。ということは、この状況が入り込んできますと、そこでは歴史、その出来事以外の歴史が終わる、ということでもあります。そして、終局の出来事を求める人間の究極の願いが尺度になるということでもあります。私どもが、この究極の願いを理解していないとなりますと、その現実存在が窮迫の状況にあるのに、その人間を私どもが真剣に取り上げていないということになるのであります。この窮迫状態こそ、人びとを私どものところに導いたものであります。(繰り返して申しますが、人びとが自分を真剣に取り上げるのにまさせて、真剣に取り上げてあげる、のであります!) そうなると、私どもが不思議がることは許されないものであります。大勢の人びとが、敢えて教会の敵とまではなりません。徐々に学び始めておりますのが、教会を袖にし、私どもを、善意の人びと、不安を抱く人びととだけと一緒にして、取り残して去って行くということでもあります。

そこで、何度も繰り返されることではありますが、目覚めさせられた牧師の息子や神学者の息子たちまでもが、この静かな避難民の群れに積極的に参加しておりますことは、いわば、ただ心理学的に条件づけられてのことではないでしょうか。あるいは、この子息たちは、近くにいますものですから、本来求められているものが何であるかを知ることからも、こういうことが生じているのかもしれませんが。人びとは、私どものところで、それを見出すことが困難になっているのであります。こんな言い方をしても、少なくとも、私の言い分に正しいところもあるのではないであらうでしょうか。人びとは、私どもに幻滅を覚えているのであります。しかも教養のあるひとと教養のないひとと同じであります。その最も深いところにおいて幻滅しているのであります。この人たちは、あまりにもしばしば、おそらく既に何世紀にもわたって間違った食べ物で食べ飽きさせられたのではないであらうでしょうか。人びとを歓迎してあげようという、まさに善意のこもった意図によって、その人たちの脇を通り過ぎるような語り掛けばかりされてきたのではないであらうでしょうか。思い込んでいるだけの人間愛から、何度も新しく間違った食べ物で食べ飽きさせようなどと考えないで、一度よく考えるべきではないでしょうか。人びとは、教会の中で、全く単純になかなか穏やかにならない不安のなかにある自分たちが真剣に受け止められ、理解されることを期待しているのではないかと。人びとは、通常(メソジストや共産主義者の集会、人智学の集会で)体験している以上に、ここ教会においてこそ、より真剣に受け止められ、理解されることを待っているのであります。

十分に驚くべきことですが、人びとは、私どもから、少なくとも、洗礼を受け、堅信礼を受け、結婚の司式をしてもらい、更に葬りをしてもらい、そのことによって、自分たちが私どもに寄せている期待がまだ完全には消えてはいないことを示してくれているのであります。同じように十分に驚くべきことは、依然として各個教会があり、また地域共同体としての教会がちゃんとあるということでもあります。

ところで、これらのものが、もしなかったとすれば、もっとよかったのかもしれませんが。

そうすれば、結局のところ、鐘が鳴った時に、それが何を意味したかに気づいたであろうと思います。

445 しかし、私どもは、神の寛容によって、悔い改めを差し控えるようなことをさせられてはいないのであります。この神の寛容は、民衆が眠りこけているということだけにおいても、私どもに示されているのであります。そして、この悔い改めこそ、今日の人間を考えてみますと、今の時代の第一の戒めであり得ると思われれます。

四

450 さて、しかし、以上は、日曜日の朝における状況の一面でしかありません。しかも、もう一つの面は、更に問題が多いのであります。そのもうひとつの面が成り立ちますのは、外面的には、聖書が開かれているということにおいてであります。少なくとも私どもプロテスタント教会におきましては。

455 ここでちょっとした間、歩みをとめてみるとよいであります。そして、そこで、はっきりさせておきたいことは、改革者たちが大胆にも教会の基礎であり目標であるのは、聖なる書物のなかで語り出された神の言葉だけであると宣言したことによって、測り難いほど危険な出来事が起こったということであります。そのことでまだ一度も嘆息したことがないひとは、そのことを喜びとした改革者たちの喜びをわが喜びとする権利はないであり
460 ましょう。なぜかと言いますと、改革者たちは、別の面からも、私どもに、かんぬきをかけてしまったのであります。その結果、私どもは、良心的に、さしあたって何かを提供することによって自分を満足させることなどできなくなっているのであります。同じように、私どもの教会員も、基本的に言ってそのようなことで自己満足することなどはありません。

465 他の教会は、どんなに比較にならないほど、はるかに確実で、持続的で、確信に満ちて、自分の道を歩んでいることでありましょうか。その教会は、よく知られておりますように、この危険に満ちた言葉原理を見出さないままにすませているのであります。この周知のカトリックの確かさを、無造作に、鼻であしらっていいというような理由は、私どもには全くありません。私が思い出すのは、アルザスから来た、あるベネディクト会の修道士のことです。この人は、戦時中の思い出を語ってくれました。ある晩、聖歌隊長として、
470 聖歌隊の仲間と共にマニフィカートを歌っていたそうです。そこに突然、フランス軍の榴弾が飛び込んできて、教会堂の会衆席のまんなかで爆発したそうです。だが硝煙はなびき、マニフィカートは歌い続けられたそうです。こう問うことが許されるかもしれません。プロテスタント教会の説教ならば続けられたであろうか、と。

475 私ども改革派の者たちが言います「神の言葉に仕える者たち」(verbi divini ministri)としての私どもの課題が私どもを圧迫し、抑圧する時、私どもはホームシックを覚えたことではないでありましょうか。カトリックの「美しい礼拝」へのひそかなる郷愁であります。祭壇における、司祭の羨ましい役割への郷愁であります。司祭はご聖体を全民衆の前に高く掲げます。意味深い力に満ちています。物的象徴は常にこの力を前提にしております。人間の言葉という象徴にまさるものであります。神のみ子の犠牲の死と受肉の二重の恵み

480 をただ言葉で宣べ伝えるだけではありません。自分の手元で遂行させるのであります。〈造り主を造る者〉(creator cratoris)なのであります。

「司祭は、もうひとりのイエス・キリストである！」。私は、ある司祭の初ミサの席で、このように文字通りはつきり告げられるのを聞きました。私どもも同じことをすることができたら、と思います！　そうです、カトリック教会におきましても、並んで聖書の解釈
485 の言葉が語られます。しかし、説教の課題は、そんなに重大なものでもなく、むしろ心配させるようなものでもあります。しかし、カトリック教会では、説教の貧しさが、前もって聖体祭儀の放つ光に覆われ、掬い取られております。聖体祭儀においてこそ、出来事が起こっているのであります。この奇跡のためにのみ、人びとは教会堂に来るのであり、神から人間へ、人間から神への道が、いかにはつきりと目に見能なものとして整えられてと
490 でしょうか。カトリックの司祭は、日ごとに、この道の中心から歩み出し、他の人びとに、この道を指し示すことができるのであります。

そこでは、問題が見事に解決されております。人間が教会のなかに求めているものに関しての最も深い関心というところで、人間をしっかりと繋ぎ止めることができているのです。たとえ最大と思われるような、私ども震撼させるようなことが起こりましても、魂と
495 世界の均衡は事実として揺らぐことなくしてくれるのであります。そこではやはり、究極の救済の言葉が今こそ語られたというように見えるのであります。私どものうちの誰が、カトリックの祭壇の sacrament の真髄、ケリュグマとしての内容、その成果を、私どもが所有しているかもしれないものを指し示しながら、それが無いからと言って拒否しようと欲するでありましようか。とは言うものの、私どもは、よくわきまえております。プロ
500 テスタント改革が、廃棄されたミサに代わり、承知して定めた、もっとよいものがあることを。それこそ、み言葉の宣教にほかならなかったはずなのであります。なぜかと言いますと、「目に見える言葉」(verbum visibile)、つまり、対象物として明示される言葉による宣教もまた、 sacrament として私どものところに残されました。改革は、それ以外のの全てを私どもから取り去りました。そして残酷にも聖書だけを残したのであります。

505 私どもが欲するのは歴史の歯車を逆転したいということでありましようか。少なくとも四分の一でも、八分の一でも逆転したいのでしょうか。私どもが、今は、カトリックのミサを容認しているのは、ただ穏やかな心、寛容な心が成長したからでしょうか。それとも、そのような力(ウーシア)も消えたからでありましようか。かつてハイデルベルク信仰問答の問い八〇は、教皇のミサを、「イエス・キリストの犠牲と苦難の否定であり、呪われた
510 偶像礼拝」とさえ呼んだのであります¹⁴。

そう言えばあまりにもはつきりとよく知られてしまっていることですが、プロテスタント教会の宣教の狭い、恐ろしく狭い基礎を広げようという試みがなされてきております。それは、私どものうちの多くの者が周知のごとく、ここが柔弱になったために身を委ねてしまうようになった郷愁でありましようか。ただひとつの例だけを挙げます。やはり、
515 まさにユーモラスな提案であります、言葉の教会のなかで苦痛に感じられる隙間を、い

¹⁴ 周知のことであるが、現在用いられているハイデルベルク信仰問答では、この問い八〇を省略して用いるのが通例である。

わゆる〈沈黙の sacrament〉をもって満たそうというのであります。これ以上におおらかな仕方で、この旅が、どこにたどり着くかを証明することができるでめりましようか。あのハイラーの祈りについての憂鬱な書物が与えた深い感銘は、あの書物そのもの以上に、考慮に値するものではないでめりましようか。真剣に考える人びとが、カトリシズムよりも更に
520 遡りまして、いわゆる教会ダンスの導入まで論じているのを聞きますと、どう考えるべきでめりましようか。おお、これら全てから生まれる困惑の思いは、ただよくわかると言う
改革者たちは、私どもにかんぬきかけてしまいました。私どもは簡単に元へ戻すことはできません。これはつらいことであります。四百年が過ぎましても、状況は依然としてこの方向を指し示したままのものとして与えられております。人は今日も繰り返してさまざ
525 まな薫香をたち昇らせて、煙に巻いておりますが、基本的な変革をもたらすことはできません。これはつらいことであります。ヤーウェの国からバアルの国に入る境界線は閉鎖されはおりませんが、効果的に閉じられたままであります。私どもの、聖書による神の言葉の宣教は、今や、一種の歴史の現実の全重量を伴いつつ指し示されております。もはや完全に揺るぎ落とされることはありません。これは厳しいことであります。
530 いわば、ゲーテの『ファウスト』の第二部の結びから出発するように、中世の明るい輝きの中に立つ代わりに、プロテスタント改革の薄暗い陰に立たなければなりません。しかも、私どもはまさしくエピゴーネン種族として立つのであります。私どもはそうなのであります。これは、厳しいことであります。先に私どもが語ったことと同じように厳しいことなのであります。私どもの説教の聴き手も、もはや聴き手ではなくなった人も、言葉を
535 期待して、つまり、「それは、本当ですか」という問いに対する答えを期待して、私どもと、私どもの教会とに対峙するのであります。スキュラとカリュブディスは、互いに見つめ合っており、私どもは、その間に立っているのであります。

五

540 しかし、私どもは、状況のこの側面を、もっと、もう少し丁寧に捉えなければなりません。この側面は、説教卓と聖餐卓の上に開かれている聖書によって、その特質が示されている状況であります。そうなりますと、改革者の聖書原理を固守すると、それが、私どもに困難をもたらすのではないでめりましようか。そうなると、それに応えるのは、そんなに些細な
545 なことではありません！ 聖書が古いとか、遠いとか（例えば聖書の世界観とか）ということが、私どもに、そのような困難を招いているのではありません。ゲーテ、シラー、ブッダ、ニーチェなどとの間に造られてきている魅力ある競争関係が、困難を招いているわけでもないのです。また一般的に申しまして、豊かな流れを作っておりますインスピレーションが、というのでもないでめりまいます。それは、聖書の思想の大道を通して流れているので、そのためにいささか狭いものになっていると感じ取られるのであります。
550

いいえ、そうではありません。聖書は、私どもにとっては、不気味なものであります。聖書が、新しい、大きな（より大きな！）緊張に満ちた期待を、別の面から教会の状況の中へ持ち込んでいるのであります。教会員は、教会の中に、まず何よりも、人間が生きる

555 ということに関わる問いを持ち込み、それに対する答えを求めます。それに対しまして逆に聖書は、まず何よりも答えをもたらしめます。それから、それに対して聖書が求めているものが続くのです。それは、答えを求める問いであります。問う人間を求めるのであります。この人間が、この問いそのもの、まさに、答えに対応する問いを理解し、求め、そして発見することを求めているのであります。

560 聖書の思考の世界の上を動いております線があります。その線が走り抜けているところが、大きな、価値に満ちたもろもろの可能性が問われているところでもあります。人生のもくろみにおける否定的可能性の全荷重をかけて問われているのであります。つまり、まさにそこで、人間の側から見ますと、あの、それは本当ですか、という問いが生まれてくるのを、私どもが見届けることができるところなのであります。

565 聖書は不気味な一面性をもって、人生の全段階を飛び超えてしまいます。この危機が、まだ鋭くなっていないところ、人間が、依然として、破綻するところのない単純さで、桜、交響曲、国歌、日常の仕事のなかに、神の臨在を知って慰めとすることができる段階を全て超えるのであります。それが、恐ろしいほどの切実さで、まず関心を抱く段階は、最高の段階でありましょうか。いずれにせよ、懷疑が人間を襲ってくる段階であります。賛美も、歓喜も、確信も、聖書の中では、それらが生じるのは、この線の此岸でなくて、彼岸
570 においてであります。人間が求める者になり、扉を叩く者になったところです。助けを求める者に、最後の困惑が襲ってきたところです。その困惑が、ここで一度はっきり申しませんが、教会のなかへと、この人を導くのであります。

ご注意いただきたいと思います。中心的な例だけを挙げようと思います。詩編において、聖書の線が、人間の生活の線を断ち切るように交差します。そこで、私どもは、はっきり
575 と答えを得るのであります。罪責意識、病気、個人的な敵、民族の敵による圧迫、神と神に関わるものからの隔離、懷疑と絶望、追い詰められること、そして死んでゆくことのなかで。

聖書は、まず、自分の状況に目覚めた人間の傍らに身を置きます。そして、人間と共に問うのであります。詩編を思い出してください。ヨブを思い出してください。いったい、
580 それは本当なのですか。すべてのものの中に意味があるのですか。目的があるのですか。神は臨在されるのですか。普通には、至るところで、この確信が揺らいでしまっているところで、そう問うのであります。

しかし、ふたつの点におきまして、あの、目覚めつつある人間の意識とは、聖書は、はっきり自分を区別いたします。

585 第一に、その区別はここに現れます。聖書からの問いに、初めて、その本当の鋭さ、その本当の意味を与えるのです。しかも、それはこんなふうなやり方によるのです。最も震撼させられている人間、最も絶望している人間を、もう一度、あの深淵のふちにまで連れて行くのであります。そのような深淵を人間は予感もしておりませんでした。喜びと苦悩、善と悪、光と闇、然りと否、私どもが人生の矛盾として知るこれらのものが、一挙にして、
590 まことに近くに接近してまいります。私どもには、最も熱い、最も燃える問いがありまして、その問いがあるゆえに、私どもは、神に向かって祈る手を高く挙げるのであります、

そのような問いも青ざめ、沈黙せざるを得なくなるような、そのような仕方、で、区別するのであります。聖書が、その違いを示すのは、このようにしてであります。私どもは気づかざるを得なくなります。全ての私どもの問いも備えに過ぎず、練習に過ぎなかったことを。そして、今こそ改めて問うのであります。どもは真剣に問うているのであろうか。私どもは、神を問うことを欲しているのであろうか。

あの忍耐に生きたヨブが、自分の苦難を嘆きました時、人間的に言いますと、終わりを知らない苦しみを語ったのであります。パウロが、罪を語りました時、そこで言おうとしていたのは、私どもが自分で嘆くような人形の罪ではありません。そうではなくて、アダムの罪であります。私どもは、この罪のなかで孕られ、この罪の中で、私どもは生まれたのであります。時の続く限り、脱ぐことはないのであろうと思われまゝ。ヨハネ文書は、この世界の闇を語ろうとしております。その時、それは、それと並んで、またそのなかに、誰にとりまして、ありとあらゆる光の親しい存在が考えられるような闇のひとつというものではありません。乱暴なペシミストが、自ら装おうとしたがるような闇でもありません。そうではなくて、闇そのものが語られているのであります。この闇に直面するところでは、オプティミストかペシミストか、どちらでありたいか、などという問いは意味を失うのであります。

そして、イエス・キリストが十字架で死なれる時、ただ単に、「これもまた真実なのですか」などと、お問いになるのではありません。「我が神、我が神、なぜ、私をお見捨てになるのですか」。人びとは言いました。イエスは、根拠づけのむずかしい言い訳をして、ご自分の無罪を語っておられる、と。あれは、なんと言ったって、本当の絶望の表現ではない、と。そして完全に見過ごしているのであります。これが、疑いと絶望でないどころか、むしろ、それ以上のものであることを。しかし、これは、私どもの、古えの教義学がなおよく知っておりまゝのように、*derelictio*、つまり、失われ、捨てられることそのもののなのであります。

聖書においては、苦しむということは、神を苦しむことであります。罪を犯すこと、それは、神に罪を犯すことであります。疑うこと、それは神を疑うことであります。赦すこと、それは神に即して赦すということでもあります。異なった表現を試みます。苦しみを伴うことでありますが、人間の諸限界をよく洞察してみます。人間が、自分の浮き沈みする人生経験と共に、多かれ少なかれ知ることができる、人間であることの限界があります。この洞察から、聖書においては、十字架の福音が生まれております。神が定められた秩序としての十字架の福音であります。人間は、今ここで、ただ一回的に、決定的に、この秩序の下に置き定められているのであります。十字架は、神の要求であります。私どもが、この方を、つまり神を、生涯にわたって問い続けることを、求められるのであります。他の、すべての問いが、たとえ解答可能であったといたしましても、私どもは、この問いからは、私ども自身をもはや解き放つことはなく、無関係になるべきでもないのであります。明瞭に、ますます明瞭に、旧約聖書、新約聖書全体において、ますます光に迫るのは、このメッセージであり、イエス・キリストにおいて、もはや全てがはっきりし、誤解されることのないものとなるのであります。

630 このメッセージは、人間を求めます。神を問うことができるし、それを欲する人間であります。自分の小さな問いを、この大きな問いのなかに、溶けさせてしまうことができる人間であります。もっとも、こういうところでは、他のどんな問いも小さくなってしまいうでありましょう。十字架のもとに、すなわち、神のみ前に、身を置くことを心得ている人間であります。

635 「重荷を負う者は、すべて、私のところに来なさい!」。何のためでありましょうか。「あなたがた自身にくびきを負いなさい!」。最もよく目覚めている人間、最もよく求めている人間でありまして、自分たちが、それほどに惨めな、重荷を負う人間であり、しかも、ひとつのくびき、キリストのくびきを、自分で負うということなど、自明のことではありません。このことを、私どもは決して会得しませんでした。そして、これまでに、千回も

640 会得していたら、と思うのであります。

第二の決定的な点は、これであります。人間の人生を問う問いは、最高の形でありまして、問いは単なる問いであります。それに対しまして、求められた答えは、第二のもの、他者として、後からやってくるものであり、問いに対立して立つのであります。それに対しまして、聖書は、人生を問う問いを、どのように捉えているかと言いますと、それを、

645 神を問う問いへと翻訳いたします。私どもは、この問いのもとに立つのであります。既に答えについて聞いておりませんと、〈問い〉を語ることも聞くこともできないのであります。聖書が私どもを導くところ、結局は、大いなる否を聞くだけであり、大いなる穴を見るだけであると言ふことができるひとが、証明しているのは、その人が、まだそこまで導かれてはいない、ということであります。このような否は、まさに然りであります。このような

650 な審きは恵みであります。このような判決は、赦しであります。このような死は、いのちであります。このような地獄は、天国であります。このような恐るべき神は、愛してくださる父であります。失われた息子を、ご自身の腕のなかに引き入れてくださる愛の父であります。十字架につけられた方は、甦らされた方であります。十字架の言葉は、そのまま、永遠のいのちの言葉であります。いかなる第二のもの、異物も、問いに加わる

655 必要はありません。問いが答なのであります。聖書全体の意味に他ならない、この逆転の真理性、現実性、本当に根拠があることなのかということが、問われるでありましょう。私が知るのは、生きておられる神の現実以外の何ものでもありません。神は神であられ、ご自身を基礎づけられる方であり、その方の現実であります。聖書は、神が何かに基礎づけられた存在であるということを一切拒否いたします。聖書は、啓示の証言をするのであ

660 ります。私どもは、その方の栄光を見たのであります。そして、問いへの答えとして栄光を見たのであります。答えを、このように聞き、認識し、知る以外にありません。

しかし、答えこそが優先するのであります。同時に答えであることがなければ、それは問いではありません。人間にとって、現実 answers であることができるためには、それは、人間に問いとして出会う必要があります。神は、然りの充満であります。ただ、私どもが

665 神を神として理解するためには、私どもは、神の否を通り抜けて、神に達しなければならないのであります。狭い門こそいのちへの導きであります。これが門であるという理由によってのみ、それは、狭くなければならないのであります。「私は、あなたがたの休息を与

えよう！」。そしてまた言われました。「私のくびきはやさしく、私の重荷は軽い」。このことが私どもにおいて真実になるためにのみ、私どもは、私どもは、くびきと重荷を自分で負わなければならないのであります。『それだから、あなたがたは、すべてのところを注いで、私を求め、私は、あなたがたに見出される！』。主はそう言われたのである。ただ主のみが、そのように、お語りになれるのであります。求めることと見出すこと、問いと答えとを、ひとつのものとすることが、おできになるのであります。しかし、聖書は、こう証言します。主は、このように語られる、と。

つまり、教会の状況の、もう一つの別の面が、何によって作られているか、ということであり。それは、なお、より大きな期待であります。聖書を通じまして、この期待が、状況の中に運び込まれるのであります。これは、このような期待であります。聖書の問いの中に自分自身の問いを再発見し、しかも、そのことによって、神の答えを見出している人間は、どこにいたのでありましようか。この神の答えは、最終的に、救いをもたらし、新しく造り、命を与え、祝福を与え、時間と、時間の中にあるすべてのものを永遠の光のなかに押しやり、希望と従順を創り出しているのであります。いかなる目も、これまで、見ることがなかったものを、今は見る目を持つ人間、いかなる耳も聞かなかったものを聞く耳を持つ人間、繊細な人間のところなら飛び込んできたであろうものを捉えてしまう心を持つ人間は、どこにいたのでありましようか。未だ現れて来ていないもの、神の子たちにさえも、いや、神の子たちにこそ未だ現れて来ていないものの保証としての聖霊を受けたいと欲し、それが可能になる人間は、どこにいたのでありましようか。自分の困窮のなかにありまして、約束を望みとする信仰を欲し、そして信じ得る人間であります。神は、そういう人間を期待しておられます。神は、そういう人間を求めておられるのであります。

聖書の中で問われているのは、私どものいのちではありません。私どもの関心事、必要、願いではありません。主が、ご自身の葡萄園で働く者を求めておられるということが書かれているのであります。教会員から教会に持ち込まれる期待は、ささやかで、取るに足りないものであります。そしてそれを、私どもは、よく理解するならば、あの期待に並べてみます。前者と同じように全く沈黙しておりますが、開かれた聖書から来る期待でありまして、これは前者と異なり具体的であります。あるいは、むしろこう言うべきでありましよう。この状況の特質を示すのは、人間の目覚めでありまして、これは、大きな、意味深いことであり、ここで神が期待してくださるということから来る光のなかにあるのであります。それ故に、人間が待つということは、どんなに真剣に取り上げられても、十分ということはありません。それは神とともに初めて企てるに至る、あの大いなる期待の落とす影にほかならないからであります。これは秘義に満ちた状況であります。誰がこのことを見誤りたいと思うのでありましようか。よく理解していただきたいと思います。しかし、私どもは無益な抵抗はしないでありましよう。まさに、この状況の中に、あの秘義に満ちたものが根源的に入り込んできました側面に従い、繰り返して申しますが、私どもは四百年前にキリスト者の世界に届いていたものにより、固く据えられたものとなっているのであります。

この期待が、ふたつの面から目指していた出来事こそ、キリスト教会の宣教であります。

710 そして、そこに男がおります。男は、この出来事においては、中心にいるわけではありま
せんが、しかし、最も前の位置に立っております。キリスト教会の宣教者であります牧師
であります。この人は、やはり、日曜日に教会堂に來たり來なかつたりする人間の側から
見ますと、いずれにせよ、人びとに答えを与える、第一のひとであります。そして、この
ひとは、聖書から見ますと、神の問い、神を問う問いのもとに、自分自身を置くことに備
715 えていなければならない第一のひとであります。しかも、私どもがそれをするでありまし
ょう。人間が問う問いに、神に問われている人間として答えるのであります。そうです。
そうなりますと、こう言えるでしょう。この男は神の言葉を語っております。人間は、こ
の人に、この言葉を求めております。神は、この言葉を語ることを委ねておられるのであ
ります。なぜかと言いますと、現実には神に問われている人間、そして神を問う人間として、
720 神の答えを知っているはずであります。人間に答えを与えることができるはずであります。
そうです、自分たちの問いを抱えて、神の答えを待っている人間たちにです。自分たちが
よくわきまえなくても、そうしている人たちであります。もしこのことが、その通りであ
るならば、キリスト教会の宣教というのは、意味に満ちている、最も決定的な出来事なの
ではないでありましょうか。

725 教会の状況全体が、このような出来事の枠組みであるとすれば、それは一挙にしてよく
理解できるものとなりましょう。牧師の現実存在も正当化されるでありましょう。牧師が、
このような出来事に仕える者であるべきであるならば、であります。まさに、プロテスタ
ンティズムにおける牧師の職務の中心である行為であります。まさに神の言葉の宣教であ
るべきならば、それは、聖書解釈にほかならない説教であります。ここで私が、こんなこ
730 とを言いますと、それは、ほとんど陳腐なことになりかねません。天から見ても地から見
ても、これに優って差し迫ったこと、必然的なこと、助けに満ちたこと、救いに満ちたこ
とはありません。これほどに、現実の状況に、これほどに適応しているものはないのであ
ります。それは神の言葉を語り、聴くということであります。その、審き、正しく立たせ
る真理の力のある神の言葉であります。全てを根こそぎ引き抜き、全てを和解させる真剣
735 な神の言葉であります。時間のなかに射し込む照明力、更に、それを超えて永遠の明晰さ
の中に届く照明の力を持つ神の言葉であります。しかも時間と永遠の両者を同時に、一方
を他方を通じて、また他方のなかに照らすのであります。生きておられる神の言葉、ロゴ
スであります。

私どもは、私ども自身に問うのではありませんか。そこで、イエス・キリストを思い起
740 こすのではありませんか。神のご意志には迫りがあるのではないか。ここ、一九二二年の
ドイツの、今日の人間のありようは、この出来事を求めて叫んでいるのではないでありま
せんか。もう一度言います。もし、自分たちがする宣教が、この出来事そのものであると
いうのであれば、私どもがする宣教とは何というもののなのでありましょうか！ そして、

宣教がこの出来事であるということは、約束であります。宣教が得ている約束なのであります。745 私どもが、私どもの状況を真剣に受け止めるならば、私どもは、他のことできません。この約束を肯定するだけなのであります。約束は、教会員と聖書との間にある私どもの状況を真剣に受け止めることと共に与えられているものであります。真剣に受け止めるということは、この注目に値する状況の背後にある神の約束をしっかりと捉え、これを信じ、これにより頼み、これに従うこと以外の何ものでもないのであります。

750 しかし、ここで私どもがここに留めなければならないことがあります。それは、私ど神の言葉を語る、ということは、キリスト教会の宣教に与えられている約束だということであります。約束は成就ではありません。約束とは、成就が、私どもに約束されたということであります。約束は、信じる必然性を廃棄するのではなく、これを基礎付けることあります。約束は、人間が関わる部分であり、成就是、神が関わる部分であります。755 神のことが人間のことだ、ということは、信じられることがあり得るだけであります。「私ども、そのような宝を土の器の中に持っています」。神の部分と人間の部分、宝と土の器が入れ替わることはありません！

どうして、誰にも、このような入れ替わることが起こらないのでしょうか。例えば、神学者と、もっと知識があるとされる不注意な哲学者との間に、そういうことは起こりませ760 ん。やはり事柄ははっきりしているのでありましょう。私どもが神の言葉を語る、といことは、ただ信じられるべきことであります。ひとりの人間の唇の上に乗る神の言葉、これは不可能です。そんなことは生じません。目で捉えることはできません。自分でやってのけるわけにはいきません。神の行為は、おそらく、天からも地からも、期待が寄せられる出来事なのであります。それ以外の何かが、待っている人間を満足させることはできません。765 他の何かが、神のご意志ではあり得ません。あるのはただひとつ、神ご自身が、それをなさるかたである、ということだけであります。つまり、神の言葉だけが、神の言葉なのであり、神の言葉であろうとし、神の言葉でなければならず、神の言葉であり続けることができるのであります。まるで、事柄が、これとは別であるかのように見なすのは、仮称に過ぎず、ちょうど反対のものに逆転させることなのであります。それが、どんなに輝770 かしく見え、キリストの教会らしく、聖書的であるように見えても。先取りされた成就是、私どもから、約束をも奪ってしまうのであります。

七

775 更にここで語られなければならないのは、教会の状況にひそむ、恐るべき危険についてあります。あのような外観を呼び覚ますようなことを、教会は全く何もしていないでありましょうか。それを誰が知るでありましょうか。神の言葉を、まるで自分の言葉であるかの如く、自分の舌に乗せるところまで到達しているのであります。よくおわかりになりましたでしょうか。このような姿は、まことに憂慮すべきものであります。この状況は、780 ますます危険なものになりつつあります。成功し、成果を挙げれば挙げるほど、そうなります。それとしっかり結びついているのが、成就するということであります。そうなれば

なるほど、私どもの教会堂は満員になります。私どもの働きは、いわば、ますます祝福されたもの、満足すべきものとなるのであります。

785 祝福とは、しかし、何でありましょうか。牧師職において、満足とは何でありましょうか。イエス・キリストを語らないまでも、預言者と使徒が、例えば、こういう人びとの印象を語ってくれているのではないのでしょうか。祝福された、満足させてくれた生活を回顧することができた人びとの話であります。私どもが、それらの人びとよりもずっとましだなどと言えるのは、何と稀でありましょうか。

790 これは何を意味するのでありましょうか。いずれにいたしましても、このことが意味いたしますのは、私どもが、一度、根底から恐れを抱くべきだということであります。あなたは、何をしておられるのですか。あなた、人間よ。あなたの唇の上に神の言葉を載せているのですか。どうして、あなたは、天と地の間の仲保者の役割りを担うようになっているのですか。あなたに、自分をそのようなところに位置付ける権限、そして宗教的気分を作り出す権限を誰が与えているのですか。しかも今や、それが成功し、成果を挙げているのですか。最高の傲り、最高の巨人主義以外の何ものでもないではありませんか。古典的な言い方はしないほうがいいかもしれません。しかも、いささか、この方がよりはっきりするでありましょう。最高のキッチュなのであります！

800 ひとが、人間性の限界を踏み越えたのであります。処罰されないことはないはずです！神の特権領域に踏み入ったのであります。処罰されないはずはありません！しかし、ふたつとも、牧師という職務に属するものであることは不可避ではないのではありませんか。教会全体の状況が、名前を持たないまま人間を傲慢にさせることになっているのではありませんか。他の領域で人間の傲慢がやっけてのけているのよりも、より悪いことではないでしょうか。

805 私がお答えしてみましようか。神においては、人間に、通常可能ではないことが、可能であります。牧師としての私は、教会の、そのような状況におきまして、ちょうど火にさらされながら火事にならないで済むように、救われているのであります。しかし、人間においては、それは不可能であります。私どもにできる限りにおいては、ただ、こう言うばかりでありましよう。私ども牧師たちに対する怒りにまさって真剣に怒りを語り得るところは、どこにあるでありましようか。あるいは、まさしく私どもが、審きのもとに立っているということを、私どもはほとんど何も知らないと言うべきでありましよう。霊的に、宗教的に、何らかの意味で。無邪気に、私はそう思いますが、実際には極めて現実的なこととして、こうでした。モーセ、イザヤ、エレミヤ、ヨナたちは、いずれも真実にわきまえておりました。説教者のこのような状況に身を置きたくない、ということをやきまえていたのであります。教会、それは、本来不可能なものであります。私どもは牧師ではあり得ません。説教すること、そこで何が行われることを知るならば、誰が説教することを許され、誰に説教することが可能でありましようか。

私どもにとりまして、教会の現状は、まだ十分に深刻なものとして思い浮かべられてはいないのではないのでしょうか。いつ私どもが、教会の状態をきちんとわきまえるようになるのでありましようか。今日、教会に対しまして、キリスト者の集合体に対しまして、教

820 養ある人びと、無教養の人びとから、教会を侮蔑する人びとから、抗議の声が挙げられて
おります。私どもが自分たちが思い切って何をやってのけてしまっているかを弁えるなら
ば、結局は私ども自身でも抗議の声を挙げざるを得ないかもしれません。結局は、そんな
声も、混じっているかもしれません。そのような抗議の声は、正しいかもしれないし、む
しろ、単純に攻撃されてみるのもよいかもしれません。ちょうどダビデが、レムの子シメ
825 イが石を投げるのを容認しましたように〔サムエル記下第一六章五節以下〕。私どもがいつ
も備えている、精緻ではありますが、その値打ちは疑わしい防具で弁論をし、防戦したり
しないでおくのであります。私どもを襲おうとする嵐は、落ち着いて、その純化の力をふ
るうがままにする方が、薦めるに値することではないでしょうか。すぐに教会らしい逆嵐
を起こして立ち向かおうとしない方がいいのです。いくつもの牧会神学の諸雑誌、あるい
830 は、その類のフォイアバッハの著作を読まないで、しかも、試してもみないで、頭を毘か
ら引っ張り出してしまうほうが、私どもにはよいのだということでありましょうか。

奇跡は、神にはまさに可能であります。その神が私どもをお選びになりました。そして
牧師として義と認めてくださろうとしております。しかも、この教会の状況のなかにおい
てであります。そうなりますと、いずれの場合にいたしましても、まさにそこで、私ども
835 自身に対する審きを受けるのであります。教会に対する審きを受けるのであります。牧師
職に対する審きを受けるのであります。なぜかと申しますと、まさにここで初めて、私ど
もは他ならぬ約束をここでしっかりと捉えるのであります。初めてここで、これを信じる
のであります。

ただ単に一般的に人間としてではありません。もしそうであるならば、気楽なことにな
840 りましょう。そうではなくて、まさしく聖職者（霊の人）として、まさしく私どもが立つ
ております中心的位置において、あの問いを、私どもに引き受けるのであります。肉と呼
ばれるすべてのものに対する、あの、大きな、謙遜を求める、死をもたらすほどの、神か
らの問いを受け止めるのであります。まさに、そのことを通じて、私どもは、初めて、〈霊
の人・聖職者〉（Geistliche）であるという状況の中に立つのであります。つまり、神の答
845 えを聴き、人間に対しては、その人たちの問いに答えるようになるのであります。私ども
の宣教は具体的な困窮を経験することを通じまして、ほんものとなります。そのことを通
じまして、初めて、私どもの職務を果たすことによって、派遣されているということも明
確になるのであります。そして派遣ということこそ私どもの宣教行為を正当・正規のもの
とするのであります。

850 レビ記第一六章によりますと、大いなる贖罪日に、大祭司は雄牛を連れてまいりまして、
これを屠り、贖罪の犠牲として献げました。これにも意味があります。「大祭司は、自分と
自分の家に和解をもたらす」罪の赦しのための献げものをするのであります。それから雄
山羊を民のための赦しの献げものといいました。この場合、雄牛を一度献げ、その間、
雄山羊の方はまだ生かして置くことにすることを薦めるほうがよかったのではないであり
855 ましょうか。

いわば、審きが神の家から始まるということ、私どもがお断りしたらどうかというこ
とであります。私ども自身、私どもの職務、そして私どもの教会を、すべての肉が立たな

860 なければならないところに置くことを拒否するのであります。そうなりますと、私どもが何
度でもそこから始めなければならない第一のものとしくなるのであります。私どもが繰
り返して思い起こさなければならない第一のこととしなないのです。書斎のデスクや説教卓
で語るといふ私どもの仕事に先行しなければならない第一のこととはしないのであります。
865 そうなりますと、私どもは、このことが意味する根底からの幻滅を、ひそかにせよ、あか
らさまにせよ、世俗的理由づけをするにせよ、キリスト者らしい理由づけをするにせよ、
逃れたいでありましょう。そこでは、私どもは、この世界に対しまして、非キリスト教的
な世界観、無宗教的な大衆、そしてその他すべてのことに対する告発に力を入れるであり
ましょう。その告発は、最初からというのではないでしょうが、やがて全重量をかけて、
私ども自身にも命中するようにも、なるでありましょう。そうすると、外にいる人びとに
対抗して語る私どもの言葉も息切れしてしまいます。そうすると、罪を語るようになりま
す。「神のようになる」〔創世記第三章五節、原著では、同箇所ののヴルガータ訳のラテン語
870 が引用されている。Eritis sicut Dei.〕。あらかじめ私ども自身に語りかけることもなしに、
であります。「あなたは、そのような男なのだ。他の全ての者以上の者なのだ！」と。

そうなりますと、私どもは、審きのもとに留まらなければならない、ということになる
のではないのでしょうか。神の言葉は、すべての肉なるものと共に、私どもを、もちろん、
この審きから、引き出そうとしていてくださるのであります。いま述べましたような拒否
875 は、こういう意味を持つてでありましょう。私どもが、あの約束で満足したいとは思わない
ということであります。私どもは信じようとは思わない、ということであります。さて、
そうなりますと、私ども自身としては、聴き、語るといふことに、どのようにして至り、
諸教会共同体としては、どのようにして、神の言葉を聴き取り、認識し、その働きにあず
かるようになるのでありましょうか。そうなりますと、私どもは、いかにして信頼するに
880 足る者となるのでありましょうか。罪の赦し、からだの甦り、永遠のいのちは、み言葉の
宣教において現実のこととなり、しかも、そこにおいてのみなではありませんか。私ど
もが信頼するに足る者となるのは、自分たちが信頼するに足らない者であることを、よく
承知するということにおいてのみではありませんか！

確信を呼び起こすように神を語るといふことが起こるのは、ただ、キリスト教会の宣教
885 そのものが、あの困窮のただなかにあるときだけであります。十字架のもとにあるときだ
けであります。あの問いのなかにいるときだけであります。神を問う問いであります。答
えることができるようになるために問うているのであります。この困窮から抜け出そうと、
私どもが欲することは許されません。

若いルターが、カトリック教会が支配した中世を非難したのも、このことであります。
890 その詩編講解、ローマの信徒への手紙の講解のどのページにも、ルターが、このことを発
見した時の驚きが語られております。スコラ学者でも、神秘家たちでも、彼らを駆り立て
たもの、それはましく、ルターが、一五一八年のハイデルベルク論争において、そう呼び
ましたように、〈栄光の神学〉(theologia gloriae) にほかならないのであります。一種のナ
イーヴな、宗教的気分醸成の行為であります。神を問う、あの問いからの一種の逃避であ
895 ります。自分が答えを与えることができるための問いでした。ここで、ルターはスコップ

を突き立てたわけでありまして、自分の神学、改革者の神学、私どもがそこに私どもが立つ地盤があると言っております神学を、〈十字架の神学〉(theologia crucis)と定義いたしました。この神学が展開される起点となりましたところは、人間が自分の最高のもの、最善のものさえも、まさしくそのようなものを犠牲とし、審きのもとに置いたところであり
900 ます。そして、そのようにして、約束を捉えたところでもあります。ただ信仰に基づいて。その理由は、ルター自身が、理由を持たず、ただそれ自身のなかに根拠づけられている神の慈愛に捉えられたからであります。十字架につけられた方であるキリストが、まさしく、ご自身が〈捨てられておられること〉(dereliction)において、約束の担い手となっていてくださるからであります。

905 この方こそ、私どもをご自身の民としてくださいました。私ども自身が自分でキリストの民となったのではありません。教会そのものが、おそらくまだ聴いていなかっとなれば、いかにして人間が教会のキリストを宣べ伝える言葉から、このことを聴き取ることができるで
910 ありましょうか。

八

私どもは十字架の神学を地盤にして立っているでありますでしょうか。このことは、私には、運命を問う問いであるように見えます。今日、私どもが、十字架とは何かということに留意しなければならなくなるところでは、プロテスタント諸教会に投げかけられている問い
915 が、これであります。

私どもは、今日、真剣な牧師たちであることを必要としております。その通りであります。しかし、この真剣さは、教会の事柄としては、その通りであります。教会そのものという意味では、全くそうではありません。人間的な牧師の真剣さというのがあります。これは教会にもあてはまります。ですが、今日の状況の真剣さに対応し得るほどに成長して
920 はおりません。

私どもは有能な牧師というものを必要としております。その通りです。しかし、経営の仕事に有能ということではありません。言葉をきちんと取り仕切るということは、経営の仕事ではありません。たとえそれが、どんなに輝かしい成果を挙げても違います。経営の仕事ということになりますと、無能な人たちだけが、そこに至ってしまう状況というの
925 がありますが、そういう状況においてこそ、有能さというものが発揮されなければならないであります。成功もせず、影響力も発揮できない状況であります。最も困難な孤立化の状況であり、否定的な結果しか生まれない状況であります。それが生涯の終わりまで続くのであります。

私どもは、敬虔な牧師を必要としております。そうです。敬虔が、あなたは、私に従いなさい！という招きにお従いすることを意味する限り、そうなのです。おそらく、右にも左にも敬虔と呼んでいるものがありますが、その全てから引き出してしまってくれるのが、このような招きへの服従であります。

ところで、ここでよく考えていただきたいと思います。〈十字架の神学〉を基盤にしたと

き、真剣さ、有能さ、敬虔とは、何を意味するとするのが、好ましいか、ということ、
935 よく考えていただきたいのであります。私どもが、その基盤に立ちたいと思うのであれば、
私どもがいずれにせよ断固として別れを告げなければならないのは、カトリックの祭壇サ
クラメントの線上にあるすべてのものであります。このサクラメントは、審きを免れるこ
とができるつもりになっている、教会の栄光を表す、まことによく考えられた象徴であり
940 ます。そして、まさしくそこで、恵みを受けないですませてしまっているのであります。
あの約束では事足りぬとさせてしまっているのであります。そうではなくて、既に成就を
得ており、成就を享受しており、それを経験してしまっているのであります。

そうです。享受することを欲しているのであります。人間の栄光が、そして何よりもま
ず教会の栄光が死んでいくことによってこそ、成就を経験するに至る道があるはずのに、
あたかもそうでないか、のようであります！ いかなる状況にあっても、いかなる意味に
945 おいても、私どもが〈創造者の創造者〉(creatores creatoris)でありたいと願うようなこと
はすべきではありません。私どもは神を造り出す〔erzeugen〕のではなく、証言する
〔bezeugen〕のであります。綴りがはっきり違うのであります。

祭壇のサクラメントの線上にありますのは、キリスト教会の宣教の困窮からの逃亡であ
ります。それ故にまた、キリスト教会の宣教に与えられている約束からの逃亡であります。
950 私どもは、錯覚しないほうがよいのであります。まだ今のところカトリックらしい外観を呈
しておりませんでも、かなり多くのものが、この線上にあるのであります。むしろ、きわ
めて福音主義的でありさえするのであります。そして、何よりもきわめて現代的でありま
す。

私は、皆さんにお任せいたします。よくお考えいただきたいのであります。ごくありき
955 たちの説教学、牧会学の著述の中にまで、このラインが広がっているのではないかと吟味し
ていただきたいのであります。私どもの、伝統的な、教会の決まりきったやり方に広がっ
ているのではないかと。まさに、さまざまな方向を目指す私どもの神学の組織神学、歴史神
学の、近頃の、特に最近の叙述では、いよいよ深く広がっているのではないのでしょうか。
およそ所有が問題になるところでは、至るところ、この線が貫かれております。同時に無
960 所有でもあることのないような所有が問題になるところです。受けるということなしの与
えるということです。欠乏ということなしの所有、無知ということのない知識、立ち上がる
ことなく座り込むこと、「こころの貧しいひとたち」のいない天の国の到来、この線上には、
勝利に至るという意識に到達することもあります。なぜかと言いますと、この確信も勝
利も神に由来するのでありますが、その神は、光のなかに住んでおられ、そこには誰も近
965 づくことはできません〔テモテへの手紙第六章一六節〕。そして、そのような方として、礼
拝されることを欲しておられるのであります。

これは、キリスト教会の宣教の危機であります。よくおわかりになりましたでしょうか。
私は、この運命的な線の話をするによりまして、いずれの側に対しても、直接の非難
をしたいとは思っておりません。事柄が、非難しやすいようには起こってはおりません。

970 私は、自分が誤認しているとは思っておりません。多くが困窮から生じているのであり
ます。従いまして、キリスト教会の宣教に与えられている約束と共に語ることができ、実

行されている可能性があります。このことは、最初に見たところ、あの運命的な一線に恐ろしいほど近いように見えます。

975 右におきましても左におきましても、国民教会におきましても、高教会運動¹⁵におきましても、年老いた者たちによっても、若い人によっても行われる今日のキリスト教会の宣教に関わる事柄におけるすべてのことが、自分なりの歩みをしております。それでいいのです、いいのです！ 「すべての人びとに役立つものなどはひとつもない。誰もが自分の留まっているところがどこかをよく見つめるがよい。誰もが自分のしていることが、すべての人に気に入るわけではない」¹⁶。

980 そういうわけで、この人に対して、あの人に対して、積極的な、あるいは消極的な位置に立って弁証論を語り対立的な立場に立つような行動をとるわけにはいきません。

おそらく、だからこそ、そこで語られること、なされることを解き、考察する集中想念¹⁷の方法を導入すべきでありましょう。牧師、神学者である私どもが、今日、これまでのいつの時代よりも事実として対峙しておりますただひとつのもの、必然的なもの、逃れ得ないものについての集中想念であります。集中想念というのは想起のことであります。私どもの言葉と行為を想起するのであります。おそらくそのような想起におきましては、もはや語られなくなったり行われなくなったりしなくなったこともあるでありましょう。かつてとは、異なった語り方がされたり、行いがなされることもあるでありましょう。おそらく、新しいものの言い方で、かつてと同じことが語られ、行われる必要もあると思われます。

985 集中想念とは、基本的に言いまして、積極的なこと、否定的なこといずれかを語ることでなくて、要するに欄外注であります。「小さな、取るに足りないこと」なのであります。集中想念は私どもを、いずれにせよ、互いに別れざるを得なくさせるようなものではないのであります。想念が生み出す結論が理論的にも実践的にも、私ども全てにおいて同じではなかったとしてもであります。

995 私はこう考えます。このような集中想念につきましては、カトリックの神学者とさえわかりあうということが原則的には可能でなければならないのではないか、と思うのであります。最終的には、祭壇サクラメントについても、そういうことが起こり得る可能性があ

¹⁵ 一九一八年に始まった福音主義教会内に起こった運動。ルターのドイツ語によるミサを導入し、司教を置くなど、中世の教会のありかたを債権しようとした。私がドイツ滞在の頃にも存在していた。東ドイツを訪ねたとき、その様な運動のミサに招かれたことがある。ミカエル共同体とよばれていた。

¹⁶ ゲーテの一八七六年頃の詩の一節。よく知られていたらしい。詩の題は“*Beherrschung*“。このドイツ語は、詩だけで用いられる。何かを「こころ」(*Herz*, ハート)に留める」ということである。なお全集は、バルトの引用はゲーテの原詩と異なることを指摘する。記憶する詩を口にしたのであろうか。意味は異ならない。

¹⁷ ここで想念集中と訳したのは、*Besinnung* というドイツ語である。こののちにバルトが一九二四年に書いた最初の教義学講義“*Unterricht der christlichen Religion*“(キリスト教の授業)のプロレゴメナにおいても重要な概念となっている(全集、英訳)。集中想念と訳してもいい。訳者の造語である。大宮訳では「意識」と訳されているが、そうではないと思っている。この頃は、現在用いられている黙想(*die Meditation*)という概念はまだ用いられていなかったと思われる。黙想という概念が用いられるようになってから、それとは区別する意味で、ケーゼマンが、*die Besinnung* という呼称を自分の聖書解釈の一部を、その名で呼んだことがある。ここでのバルトの用い方は、ここにおける独自のものと思われるが、今ならば、黙想という概念をもちいたかもしれない。

1000 ると思います。もちろん、全くこれを受け入れることがありませんでも。キリスト教会の宣教の困窮と約束、神の審きと神の義認は、おそらく、最終的には、トリエント総会議の教会以前にまで遡り得ると思うのです。

私どもプロテスタントの者にも、カトリック的なものがまだ十分残っていると思っております。ですから、改革者たちが関心を抱いた事柄が、私どもにおいても、単純に死んでいたりはないと思われまゝす。私どもにとって、それは自明のことではないのであります。私どもが、このことを、よく承知しているのかどうか、私どもの内面で、このこと
1005 に目覚めているのかどうか、それを問うことを、日常の当たり前のことにしてはいけな
いと思ひます。今日も明日も、私どもは、自分の内において目覚めていなければなりません。真実に、改革は、四〇〇年以前と全く同じように可能であり、必要なのであります。この
ような集中想念が行われるところ、改革が起こるのであります。

皆さまにおきまして、おそらく、苦々しい憂慮の思いよりも、改革を憧れる思いの方が、強く、別物のように現れたことがあると思ひます。、こうお考えになるでござりましょう。
1010 ほかにどうしようもないではないか。このようにため息をついて、こう祈るばかりである。

「おいでになってください、造り主であられる聖霊よ！」(Veni creator spiritus!)。ローマの信徒への手紙第八章によれば、これは、かつて、凱旋の言葉というよりもよりも、希望に溢れるものだと言はれたのであります。もし、皆さんが、聖霊を得ていさえすれば、とい
1015 うことであります。皆さんが、この嘆きの祈りを、お聴きになり、理解しさえすれば、皆さんは〈私の神学〉のなかに導き入れられていることになるのであります。皆さんのお氣に召したということにまさせて、よく理解していただくればよいのであります。

そうなりますと、私が、一種の希望の信仰告白をもって結びの言葉と致しまして、よく理解して下さることであらう。それは、カルヴァンが、ミカ書第四章六節(「その日が来れば、と主は言われる。わたしは足の萎えた者を集め／追いやられた者を呼び寄せる」。)を解き明かす言葉であります。これについてカルヴァンは、こう言うのであります¹⁸。「たとえ教会が、死んだ男、あるいは役立たずになった男と区別がつかないような
1020 ことになりまして、だからと言って絶望することはゆるされません。なぜかと申しますと、主が、ご自身に属する者たちを、立たせてくださいます。ちょうど死者を墓から呼び
覚ましてくださいますように。よくご注意ください。なぜかと言ひますと、教会の光が衰えると、私どもはすぐに、もう消えてしまうと思ひます。もうおしま
1025 いだと思ひます。しかし世にある教会は保たれております。教会は、そして一挙にして立ち上がるのであります。そうです、最後に起こる出来事は、教会が、
その様な奇跡によって、日毎に支えられるということであらう。固く確信しなう。教会のいのちは、甦りなくしてあり得ません。いや、それ以上です。たくさんの甦りなく
1030 してあり得ないのであらう」。

¹⁸ 全集は、以下のカルヴァンの文章全文をラテン語で引用する。それによれば、全文をバルト自身がドイツ語に訳して朗読し、その「教会のいのち」に始まる最後の部分だけをラテン語で繰り返したのである。